



先月までの為替相場のレビューと、
今後の注目の経済指標やイベントを元に、為替相場の展望をお届けします。

2016/08/01

夏季休暇シーズンだが重要イベント多し

通貨ペア	基調		ページ数
<u>ドル/円</u>	➡	8月円高アノマリーは？ 予想レンジ: 99.000~106.500円	2-3
<u>カナダ/円</u>	➡	原油安が重石 予想レンジ: 74.500~80.500円	4-5

※通貨ペアをクリックすると、そのページにジャンプします



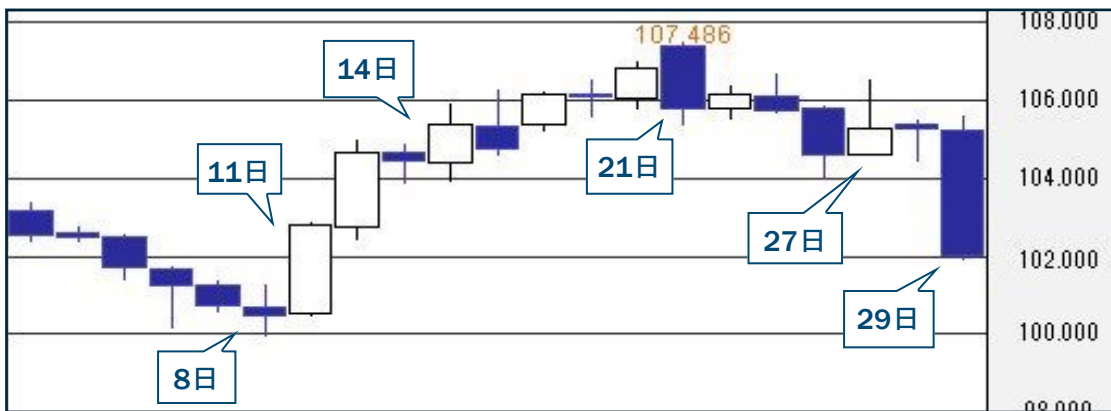
本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

Copyright©2016Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com

USD/JPY

ドル/円 7月の推移

7月のドル/円相場は99.979～107.486円のレンジで推移。月間の終値ベースでは約1.1%の下落(ドル安・円高)となった。上旬は、世界的な債券高の流れに沿って米10年債利回りが過去最低水準を更新して低下する中でドル安・円高が進行。8日の米6月雇用統計発表直後には一時100円を割り込む場面もあった。しかし、中旬以降は日本の財政・金融政策の拡張期待から円安に振れた上に、一時立ち消えになっていた米利上げ観測が再燃する形でドル高も進み、21日には約1カ月半ぶりに107.486円まで上昇した。ただ、その後下旬にかけてじりじりと上値を削り、月末最終日の29日には、日銀の「金融緩和の強化」に対する失望の円買いと、米4-6月期国内総生産(GDP)の下ブレを受けたドル売りが重なり、一時101円台に差し込んだ。



四本値	
OPEN	103.183
HIGH	107.486
LOW	99.979
CLOSE	102.076

8日	米6月雇用統計は、非農業部門雇用者数が前月比28.7万人増と予想(18.0万人増)を大幅に上回った一方、失業率は予想(4.8%)以上に悪化して4.9%に上昇。平均時給は前月比+0.1%と予想(+0.2%)に届かなかった。こうしたマチマチの雇用統計を受けて101.20円台まで急騰したのち99.90円台まで急落するなど乱高下した。なお、非農業部門雇用者数は3.8万人増に留まっていた前月分が1.1万人増に下方修正された点がマイナスに評価された反面、失業率の上昇は労働参加率が62.7%に改善したためマイナスの評価には繋がらなかった。
11日	前日に投開票された参院選に圧勝した自民党総裁の安倍首相が「明日、経済対策の準備に入るよう石原大臣に指示」「力強いスタートを切る経済対策にしたい」「ゼロ金利環境を生かし、財政投融资を積極的に活用」などと発言。大型の財政支出を伴う経済対策への期待が膨らみ日経平均株価が600円超上昇する中、102円台を回復した。
14日	本田前内閣官房参与が通信社とのインタビューで、安倍首相と12日に会談したバーナンキ前米連邦準備制度理事会(FRB)議長が、今春に訪米した本田氏との間で永久国債発行のアイデアを議論していた事を明らかにした。これをきっかけに円売りが活発化し105円台を回復した。
21日	日経新聞朝刊が「日本政府、経済対策で20兆円超の規模を視野に」と報じた事を受けて107.486円の高値を付けた。しかしその後、ブルームバーグが「日銀内で、巨額の国債買入れを続ける現在の量的・質的緩和の持続可能性に懸念を示す向きが増えている」と報じた上に、英BBCラジオが黒田日銀総裁の話として「ヘリコプターマネーは必要ないし、可能性もない」と述べたと伝えた事を受けて追加緩和期待が萎むと105.40円台まで下落。
27日	「政府の経済対策の事業規模は28兆円に」「日本政府は経済対策の一環として50年債の発行を検討」などと報道が相次ぐと106.50円台まで円売りが活発化したが、その後財務省筋が50年債検討の報道を否定すると上げ幅を縮小。なお、米FOMCは声明で「雇用のデータは労働力活用の一定の増加を示す」「経済見通しへの短期リスクは後退」などとやや楽観的な見解を示した。ただ、9月利上げに関する直接的な言及がなかったとして、ドル買いは一時的だった。
29日	日銀は金融政策決定会合終了後に、上場投信(ETF)の年間買入れ額を従来の3.3兆円から6兆円に引き上げると発表。その他、金融機関へのドル資金供給スキームを拡充した。この「金融緩和の強化」発表直後には、瞬間的に105.50円台まで上昇したものの、長期国債の買入れ増額や政策金利の引き下げ(マイナス金利の深堀り)を見送った事に対して失望が広がると102.60円台へと急反落。なお、黒田総裁は会見で次回9月会合でこれまでの政策効果を検証した上で、必要なら追加緩和を辞さない姿勢を表明したが反応は薄かった。その後、米4-6月期GDP・速報が前期比年率+1.2%と、事前予想(+2.5%)を大きく下回り、ドル売りが活発化すると一時102.00円を割り込んだ。

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

USD/JPY

米2年債利回

OPEN	0.5817%
HIGH	0.7737%
LOW	0.5337%
CLOSE	0.6554%

米10年債利回

OPEN	1.4680%
HIGH	1.6266%
LOW	1.3180%
CLOSE	1.4531%

日経平均

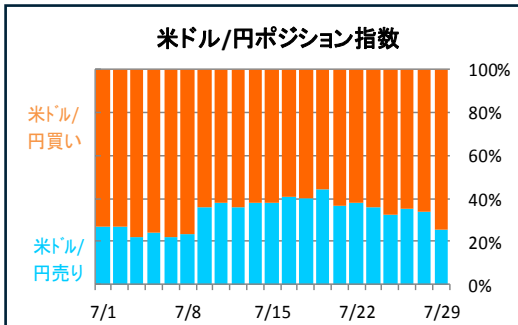
OPEN	15698.02
HIGH	16938.96
LOW	15106.52
CLOSE	16569.27

NYダウ平均

OPEN	17924.24
HIGH	18622.01
LOW	17713.45
CLOSE	18432.24

7月のポジション動向

8月の日・米注目イベント



- ・7月米ISM製造業景況指数(1日)
- ・日本政府、経済対策を閣議決定(2日)
- ・7月米ADP全国雇用者数(3日)
- ・7月米ISM非製造業景況指数(3日)
- ・6月米貿易収支(5日)
- ・7月米雇用統計(5日)
- ・6月日本経常収支/貿易収支(8日)
- ・7月米小売売上高(12日)
- ・7月米生産者物価指数(12日)
- ・4-6月期日本GDP(15日)
- ・7月米住宅着工件数(16日)
- ・7月米消費者物価指数(16日)
- ・7月米鉱工業生産(16日)
- ・7月米中古住宅販売件数(24日)
- ・7月日本消費者物価指数(26日)
- ・4-6月期米GDP・改定値(26日)
- ・イエレンFRB議長、講演(26日)
- ・7月米個人消費支出(29日)
- ・8月米消費者信頼感指数(30日)

8月の見通し

月間指標カレンダー(外部リンク)

毎年、この時期になると為替市場では「8月は円高になりやすい」というアノマリーが囁かれる。実際に、2000年代以降の8月月足を振り返ってみると、陰線(ドル安・円高)が10本、陽線(ドル高・円安)は6本と、62.5%の高確率で円高に振れている事がわかる。8月は米国債の利払い・償還が多いため、世界第2位の大口保有者である本邦投資家によるドル売り・円買いが膨らむとの観測や、お盆休みを前にした本邦輸出企業が一斉にドル売りに動くとの観測などが、円高アノマリーの背景とされる。もっとも、最近の5年(2011年～2015年)に限れば8月の月足は、昨年の陰線以外は全て陽線となっており、アノマリーとは真逆のドル高・円安傾向を強めている。これは、東日本大震災後の輸出の(ドル売り)低迷と、アベノミクスによる円安期待が影響したと見られる。今年の8月については、輸出の低迷が継続する中で、安倍政権が大型経済対策を盛り込んだ今年度2次補正予算を編成、日銀が9月の追加緩和を視野にこれまでの政策の「総括と検証」を進めている事を考えれば、円安に振れる下地は整っていると思われる。

もちろん、ドル/円相場を考えるに当たっては米国情勢も見逃せない。具体的には、5日の7月雇用統計や12日の7月小売売上高などの重要経済指標の結果を受けて、9月利上げ観測がどのように変化するのがカギとなろう。利上げ観測については、イエレンFRB議長がワイオミング州のジャクソンホール会合(各国中銀関係者が集まるシンポジウム)で行う26日の講演も重要な手掛かりとなるだろう。(神田)

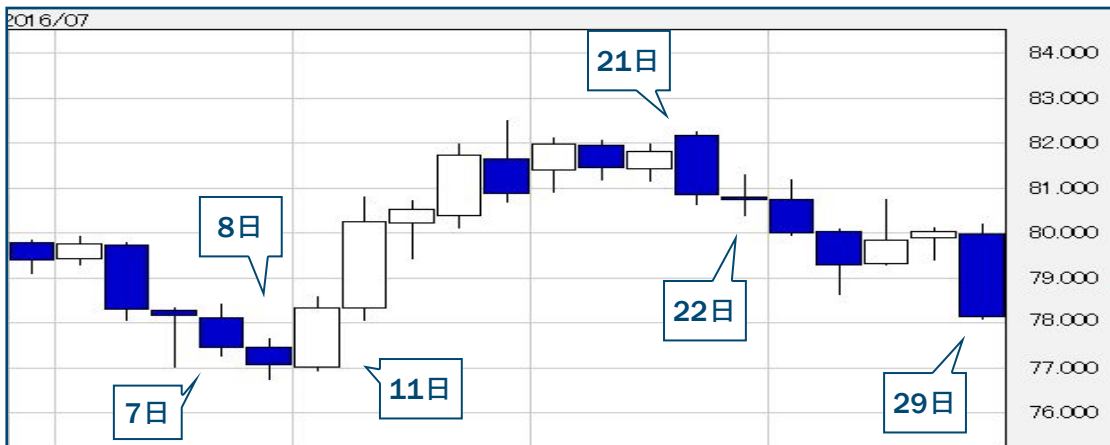
(予想レンジ: 99.000~106.500円)

カナダ/円 7月の推移

CAD/JPY

7月のカナダ/円相場は76.766～82.516円のレンジで推移。月間の終値ベースでは約2.1%の下落(カナダドル安・円高)となった。

NY原油先物がじり安で推移する中、カナダ/円は軟調に推移。加6月雇用統計が弱い結果となった事も重なり、8日に76.766円まで下落した。本邦参院選を消化すると、日銀の追加金融緩和観測と共に、政府による景気対策観測も高まり、円売りが活発化して15日に82.516円まで値を上げたが、上値は重かった。根強い供給過多懸念を背景にNY原油先物の下落が止まらず、29日に約3か月ぶりに41ドルを割り込んだ事や、日銀の発表した金融緩和策が市場の失望を誘う内容であった事から、カナダ/円は29日に78.105円まで再び値を下げるなど、上値の重い展開となった。



四本値

OPEN	79.799
HIGH	82.516
LOW	76.766
CLOSE	78.162

7日	米エネルギー情報局(EIA)の週間原油在庫統計で、原油在庫が市場が予想していたほど減少しなかった事から、NY原油先物が一時44.87ドルまで急落。これを受けてNYダウ平均が下げに転じた事も重石となり、カナダ/円は77.300円まで下落した。
8日	加6月雇用統計は失業率が2015年7月以来となる6.8%に低下するも、新規雇用者数が0.07万人減と予想(0.50万人増)外の減少となったほか、労働参加率は65.5%と1999年12月以来の低水準になるなど、弱い内容であった。NY原油先物の軟調推移も重石となり、カナダ/円は76.766円まで下落した。
11日	本邦参議院選挙で大勝した安倍自民党総裁が「しっかり内需を下支えする総合的かつ大胆な経済対策を実施したい」などと発言すると、景気刺激期待が高まり日経平均が一時700円超上昇した。前連邦準備制度理事会(FRB)議長のバーナンキ氏が日銀を訪問したとの報道も、デフレ脱却期待を高めて株高・円安を後押し。NYダウ平均の堅調推移も追い風となり、カナダ/円は上昇した。
21日	「日本銀行内で、巨額の長期国債を買い続ける現在の量的・質的金融緩和の持続可能性について懸念を示す向きが増えつつある」と報じられた事や、黒田日銀総裁が英BBCのインタビューで「ヘリコプターマネーについて、必要も可能性もない」と発言した事から、円買いが活発化。カナダ/円は81円を割り込んで下落した。黒田総裁のインタビューが6月中旬に行われた事が明らかとなるとショートカバーが入ったが一時的となった。その後はNYダウ平均が10日ぶりに下落した事や、NY原油先物が軟調に推移した事が重石となり、80.646円まで再び値を下げた。
22日	加5月小売売上高が前月比+0.2%、自動車を除くと同+0.9%と、予想(±0.0%、+0.3%)を上回った。同時刻に発表された加6月消費者物価指数は前月比+0.2%、前年比+1.5%と予想(+0.1%、+1.4%)を上回る伸びとなり、カナダ/円は81.313円まで上昇。ただ、その後はNY原油先物の軟調推移が重石となり、80.408円まで反落した。
29日	市場で緩和期待が高まる中、日銀がETFの買い入れ増額(3.3兆円→6兆円)を発表すると、円売りが優勢となりカナダ/円は80.222円まで値を上げた。しかし、長期国債やREITの増額、政策金利の引き下げは見送られたため、失望の円買いが強まって78.105円まで反落した。なお、加5月国内総生産(GDP)は前月比-0.6%(予想-0.5%)であった。

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

加10年債利回り

OPEN	1.060%
HIGH	1.161%
LOW	0.952%
CLOSE	1.027%

N Y 原油

OPEN	48.38
HIGH	49.35
LOW	40.57
CLOSE	41.60

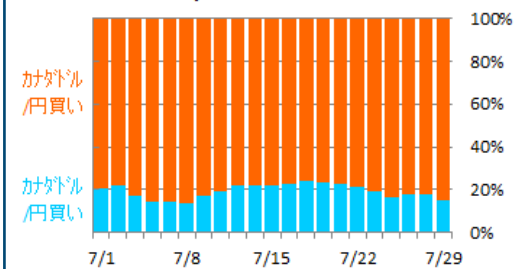
NYダウ平均

OPEN	17924.24
HIGH	18622.01
LOW	17713.45
CLOSE	18432.24

7月のポジション動向

8月のカナダの注目イベント

カナダ/円ポジション指数



- ・7月加雇用統計(5日)
- ・6月加貿易収支(5日)
- ・7月加Ivey購買部景況指数(5日)
- ・7月住宅着工件数(9日)
- ・6月加新築住宅価格指数(11日)
- ・6月加小売売上高(19日)
- ・7月加消費者物価指数(19日)
- ・4-6月期加経常収支(30日)
- ・6月、4-6月期加GDP(31日)

[月間指標カレンダー\(外部リンク\)](#)

8月の見通し

カナダ中銀は昨年7月に政策金利を引き下げた後は据え置いているが、本稿執筆時点での金利スワップ市場によると、10月までの利下げ確率が約30%織り込まれている。その背景として、5月にカナダで発生した山火事の影響や、下落局面に入った可能性のあるNY原油先物が挙げられる。カナダドルを積極的に買う材料が見当たらない中では、カナダドル/円相場は今月も上値の重い展開となる事が予想される。

テクニカル面では、7月の上伸は日足の一目均衡表の雲に上値を抑えられて失速するなど、上値は重かった。週足や月足で三役逆転が点灯する中、日足でも点灯するようならば6月24日に付けた直近安値(75.983円)割れを試す可能性がある。仮に反発したとしても、中長期トレンドが下向きの中では週足の一目均衡表の転換線(同、80.273円)が戻りいっぱいとなる事も考えられる。

もっとも、8月はカナダや日本で金融政策の発表が予定されていない事や、世界的に夏季休暇シーズンである事から、為替市場に限らず株式や商品市場にも様子見ムードが漂うようならば、カナダ/円相場は小動きとなる事も考えられる。その場合は、ジャクソンホールでの米連邦準備制度理事会(FRB)のイエレン議長の講演(26日)が近づかないと、動意薄の展開からなかなか抜け出せないかもしれない。(川畑)

(予想レンジ: 74.500~80.500円)